

大久保彦左衛門

中央公論社

大久保彦左衛門

村上元三

大久保彦左衛門 ©一九六一

定価三八〇円

昭和三十六年六月一日 初版印刷
昭和三十六年六月八日 初版発行

著 者 村上元三
発行者 栗本和夫
印刷 凸版印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二八一
電話(561)五九二一、三〇
振替口座 東京三四

目次

山犬左門
彦左登城
花ごろも
一心鏡ノ如シ
殺刀陣
小太刀の娘
ふたり旅
一殺十金
つばくろ文
旗奉行
雷神

七
六
三〇
四
五
五
七
九
一〇三
一〇
一四

竜 卷

一四七

普化僧風呂

一六二

天 の 河

一八三

増 髪

一九八

江戸 六方

二二七

破風障子

二三五

百騎野分け

二五〇

みやこ風流

二六二

壬生 狂言

二七三

小松の内侍

二九〇

冬 の 雲

三〇五

びるしゃな

三二

十六むさし

三九

彦左衛門上洛

三七

春日竜神

三七

二条城

三九

一代二千石

四〇五

挿画 中一弥
装幀 宮田重雄

大久保彦左衛門



山犬左門

大門だいもんも閉めたというし、この吉原の廓の町名主庄司甚右衛門が指図をして、若い者たちが総出で取りしずめにかかっているというから、役人を呼ぶにも及ばず騒動はおさまると思える。

しかし、昼遊びの客が帰るころであり、夜の客がくり込んでくる刻限にぶつかったので、よくある喧嘩とは違って、弥次馬も大ぜい出てひどく派手なさわぎであった。

山犬と異名のある旗本の次男坊が、遊女のことか因で、廓で威勢を張っている町奴たちと争いを起したのだという。春に入つてめずらしく、今朝は江戸の空から粉雪がちらついたが、昼すぎから雲が切れ、夕方近くなると、すっかり晴れてきた。

「喧嘩は、京町のほうへ移ったようでございます」
角町の真中あたりにある海老屋という遊女店の二階へ、あるじの六郎兵衛があがって、そう告げた。

二階座敷に集まっていた十人ほどの男たちは、いづれも派手な衣裳ながら、町奴とも見えず、打ちとけた態度で商

売の話をしていた。

めいめい、そばに遊女たちを坐らせ、なごやかな話し合いのようにも思えるが、その実は商売にとって大切な相談があるらしい。しかし、遊び慣れている連中だし、改まってむずかしい話をするわけでもなく、それとなく酒席の上で相談を進めている。

こういう大きな店の遊女は、客の話の内容をよそへもらす気づかいはないので、かえって重大な打ち合せをするには向いている場所だし、この座敷の客は、大事なところになると、だれにもわからない隠語を使った。

「こっちへ喧嘩が流れてくるようだね」

一ばん下座に、ひとり離れて坐っていた客が縁側へ出ていって、手すりから下をのぞいた。

頭は撥^{はく}で、浪に千鳥をあしらった裕^{あはせ}を着ている。三十を二つ三つ越しているだろうか、背は低い、がっしりと肩の張った、眉の太い、それでいて柔和な感じのする顔つき、の男であった。

「元締」

と、後ろから六郎兵衛が声をかけて、

「かかり合いにならないほうがよい、と存じます。相手は、山犬とわれから言う通り、だれかまわずに食いつくお人でございますから」

「お槍奉行のご次男だとねえ」

元締と呼ばれた男は、振り返って笑顔を見せた。

これは、魚河岸へ行けば元締とだけで通る太助という男で、右の腕に一心、左の二の腕に如鏡（鏡ノ如シ）と刺青をしてある。

それを人の前でひけらかしたのも若いころのことで、今では喧嘩一つしたことなどないながら、いのち知らずの連中を大ぜい心服させるだけの器量を備えていた。

「噂は聞いていたが、あのご仁だね」

太助は、手すりから下を見た。

京町のほうから、ちょうど灯ともしごろのこの角町の道へ、なだれを打って人が走ってくる。

「寄るな、寄るな」

「怪我をしてはならねえ」

廓の若い者たちが、遊びの客たちを近づけまいとして声を張っているが、もちろんこんな向う見ずの喧嘩に巻き込まれようという物好きはいない。

大門も閉ざし、廓の外から入ってくる弥次馬を防いでおいて、役人たちも頼まず、喧嘩を大きくしないうちに納めよう、と町名主の庄司甚右衛門が図ったのだが、そう容易には運びそうもなかった。

喧嘩をしている相手同士が、原因はともかく自分の勢いを他人の前で見せてやろう、という意識のほうが強いに、始末に負えない。

それは、三に対する十という人数の喧嘩であった。

三人のほうの真中にいるのは、二十二、三歳になるであろうか、この寛永ごろの江戸の旗本のあいだで流行している丹前風の派手な衣裳で、大きな轡くらわの模様をあしらった着物に、花やかな緞子の袴、美しい作りの大小を腰にさしているが、まだ刀は抜かず、廓の若い者からふんだくったのであろう、金棒を抱えていた。

わざと月代を立て、それもきれいにそろえて、鬢の毛が白い頬に乱れているのが、遊女屋からみれる灯明りの中で、色っぽい感じがする。ふつくらとした面長で、目が大きい。唇が小さく、薄いのが、人に冷たい印象を与える。

自分が美男で、女にもてると承知をしながら、おしゃれをする一方、山犬などとわれから異名をつけ、やたらに喧嘩を売っている、これが今村左門という名うての暴れ者であった。

父親が、公儀の槍奉行今村九郎兵衛という名門の旗本だけに、町役人たちが手も出せずにいるのをいいことに、左門は同じ旗本の次男や三男坊たちを集め、山犬組となえて、市中の遊び場や盛り場を押し歩いている。

今夜の左門には、組の仲間が連れ立っていない、家来の白川馬之進と鎌髭奴の藤内の二人がついていた。

相手は、吉原の廓の地回りで、自分たちは町奴と称しているが、髪や衣裳は派手ながら、弱い者いじめを専門の、

信玄組の勘助とその乾分たちであった。

勘助は、山本勘助の血を引く者で、武田信玄を守り本尊としている、などと威張っているが、甲州の生まれなのかどうか、それも怪しい。

ただ、勘助というのは身の丈六尺を越え、力が強く、諏訪法性の兜に因んだのであろう、兜を大きく染めた揃いの衣裳を着て押し通ると、だれでも道を避ける。

もう五十歳を越した勘助が、今村左門を目のかたきになっているのは、廓の遊女が因だというが、左門には理由などどうでもいい、喧嘩を売られれば、是非を問わずに買うのが建前であった。

「さあ、これで三人たたき伏せた。まだ残っているとほかりがたい」

金棒を構え、うれしそうに左門は叫んだ。

無造作に左門は金棒を構え、さっきから信玄組の三人をなぐり倒したが、見ていた遊びの客の侍の中で、武芸に達した者の目には、左門が棒術の奥義をきわめているとわかる。

「馬、藤内、手を出すな」

と、家来と中間を制しておいて、ひとりで十人を相手にした左門には、十分にゆとりがあり、残りの七人をからかっている態度であった。

「ひるむな、ひるむな」

信玄組の勘助は、こういう喧嘩には慣れてるだけに、すぐ遊女屋からつかみ出した棒や高張り提灯の柄を獲物に、左門の三方を囲んだが、見る間にまた一人、左門の金棒で足を払われ、よろめくところを突き倒された。

町名主の庄司甚右衛門は、若い者たちと一緒に仲裁に入ろうとしているが、双方ともに甚右衛門を寄せつけないので、

「廓うちでの争いはおやめ下され。お役人がたがお出張りになれば、われら一統ことごとく迷惑をいたします」

と、声をかけているだけだが、もちろん左門のほうは旗本の次男であり、好んで喧嘩を派手にしようとしているので、そういうことは問題にしていらない。

庄司甚右衛門が、もと小田原の北条家に仕えた侍で、徳川家康に許されて吉原の廓を開いた、などという話は聞いているが、だれが困ろうと気にしては、山犬組の面目にかかわる、と左門は考えている。

だが、信玄組の勘助のほうは、役人が廓へ入ってきたらあとが面倒なので、喧嘩のかたは早くついたほうがいい。

「それ、相手に息をつがせず、一気にやれ」

わめいて棒で打ってかかる勘助を、金棒であしらっておいて、左門は、灯の明るい海老屋の前のほうへ移動した。

こうすれば足場もいいし、大ぜいの男女が見物している前で、派手に勘助をたたき伏せてやれる、という子供のよ

うな計算が左門にはある。

「これはいかぬ」

海老屋の二階の手すりから見おろしていた、一心と異名のある太助がつぶやいて、

「仲裁をしよう」

「でも、相手が相手ゆえに、元締に後日の難儀がかりましては」

あるじの六郎兵衛の声を、幅の広い背中に聞き流し、太助は大段梯子をかけおりた。

「さあ、よいか」

ちょうど海老屋の真前で、左門は、勘助の棒を押えつけると、

「乾分の者ども、よく見ておけ。おのれたちの親分と奉る男が、ぎゃつというて気を失うところをな」

手の金棒を、少しずつ斜めにした。

これでは、左門の金棒が相手の棒を払いのけ、八双からそのまま勘助の頭をなぐりつけるのが、次の瞬間に違いない。

「お待ちを願います」

太助が、横合いから声をかけた。

黙って左門は、太助の顔を横目で見た。

その左門の顔に、薄笑いが浮かんだ。頭から相手をなめ切った笑いであった。

「仲裁無用」

と、金棒で勘助の棒を押えておいて、左門は右足を引くと、

「それ」

勘助の棒をたたき落すと同時に、頭上から一撃を加えようとした。

その金棒が、横から飛び込んだ太助の手で押えられた。

「ここは、あなた様の勝ち。引きぎわが肝要でござります」

そういつた太助の顔に、こんどは微笑がある。

「おのれ」

かっとして左門は金棒を引こうとしたが、太助のほうが腕力は強い。

「よさねえか」

片手で左門の金棒をつかんだまま、太助は勘助をにらみつけた。

「おれの顔は知っているだろう。魚河岸の太助だ。ご身分のあるお方と争いを起し、江戸におられなくなってもいいというのなら、そうしてやるが」

一間ほど飛びすきって、信玄組の勘助は、息をのんでいたが、

「元締に出られたのでは仕方がねえ。今夜はお任せ申します」

「待て、おのれ」

左門の声に背中を向け、勘助は乾分たちをうながして、海老屋の前から走りはじめた。

「はなせ」

かっとした左門は、太助の手から金棒をもぎ取ろうとしたが、太助の体は少しも動かず、微笑を浮かべたままで、

「あなた様は、喧嘩の達引（たしひき）をご存じではございませんぬ」

「なに」

「わたくしは毎日、荒っぽい連中の喧嘩を抜いつけておりますが、あなた様の喧嘩ぶりは、いかにもまづうござります」

「そのほうは」

こんどは、逃げていつた勘助よりも、左門にとつては新しい喧嘩相手が出来たわけであった。

「魚河岸の太助と申す男だな」

「まだご挨拶も致しませぬが、しがねえ者でござります」

「噂は聞いておる。おのれと喧嘩してくれようと、前々から待っていた。参れ」

「まず、まず」

と太助は、軽く左門の金棒をはなしておいて、丁寧に頭を下げた。

「それほど喧嘩がお好きなれば、達引をお教え申しませう」

「魚屋ごときに教えられることはない」

足を引くと、左門は金棒を振りあげ、太助の肩口へ振りおろした。

その左門の目の前から、太助の姿が消えていた。

「ふむ」

鼻先で笑い、左門は金棒を取り直した。

武芸の心得があつて、一心太助が金棒をかわしたのではなく、喧嘩慣れしているので身のさばきが巧みであり、一間ほど横へ軽く飛んだ、とわかるだけに、左門は、相手をなぶつてやろう、という気持になった。

こういうとき、整った目鼻立ちをしていながら、自分で山犬と称して暴れ者の組を作つたりする左門の横紙破りの気性が、はつきりと顔に出る。

きらきらと目が活気づいて光り、頬のあたりに血の色がさして、全身が熱くなると、もう左門はだれの言うことも耳へ入らなくなつてしまふ。

「よし、好きなように動いていよ。おのれを、大ぜいの者たちが見ているこの場でたたき伏せてくりよう」

相手が魚河岸で聞えた太助となれば、今までの信玄組の勘助などと違って、左門には張り合いがある。

金棒を右肩の上へ振りかぶったとき、海老屋の暖簾のれんの下まで退いていた一心太助は、低く声をかけた。

「わたくしをたたきのめす前に、宇都宮においでのお方について、お聞きになりたいとは思ひではございませぬ

か」

「宇都宮の」

左門の目の中に、動揺の色が走った。

「そ、そのほうは」

「いかがでございましょう。ご酒をさし上げながら、お聞き願ひたいと存じます。その後で、わたしをどうなさろうと、ご自由」

ゆっくりした太助の語調だが、やわらかく相手の心をなだめて、もみほぐすような感じであつた。

金棒を振りかぶったまま、じつと左門は太助をにらみつけていた。

「いずれへ参る」

「これへ」

と、太助は、海老屋の暖簾を、丁寧に示して、

「ご家来も、お供の人も」

白川馬之進と藤内をうながした。

「よし」

左門は、手の金棒をほうり出してから、

「馬も藤内も、ついて参れ」

先に立つて、海老屋へ入つていった。

ぐずぐずと考へていることがきらいで、白い黒いをすぐ決めるのが侍気質だ、と左門は考へている。

左門に続いて、家来と中間が海老屋へ入つたのを見て、

一心太助は、店へ近づいてきた庄司甚右衛門へ一礼した。
「どうやら、これで騒ぎもおさまったようでございます」
「ありがとうよ、元締」

ほっと息をつき、甚右衛門も頭を下げた。

元和四年、ここに吉原の廓を開いてから、この寛永十年まで十五年、甚右衛門はいろいろな苦勞を重ねているが、近年のように旗本奴や町奴たちが遊び場で威勢を競い、喧嘩が絶えないと、町名主として警察権を持っている甚右衛門でも、手のつけられぬことが多い。

むかしは、このあたり一めんに葦が生い茂っていたので、それから吉原という地名が生まれた。

徳川家康が、当時の町奉行米津勘兵衛に命じ、公娼をひとところに集めて傾城町を作させたのは、江戸に私娼がふえるのを禁じようとしたためであった。

願い主の庄司甚右衛門が、尾張町と彌宜町のあいだに大門を建て、京、伏見、大坂、奈良などから江戸に集まってきた遊女屋をここにまとめるまで、随分と面倒な問題もあったが、結局は甚右衛門が強引に指図をとらなかったら、こういう廓は出来ていなかったかも知れない。

しかし、こういう遊び場がにぎやかになるにつれて、弊害がふえてくるのは、庄司甚右衛門には一ばんよくわかっている。

「元締」

と、甚右衛門は、太助のそばへ寄って声をひそめると、
「山犬を背負い込んで、難儀になりはしませぬか」

「ご安心下さい。山犬の泣きどころを、わたくしは存じております。それよりも、信玄組の連中が、仕返しなどいって騒がぬよう、お手配を願います」

「大門をひらいて、お役人衆へお頼みしておこう。廓も商売だから、いつまでも喧嘩騒ぎでお客の足をとめてはおかれない」

まだ六十歳にあと二つ三つというところだが、もう髪が真白になった甚右衛門は、品のいい目鼻立ちの顔に微笑を浮かべた。

「こちらは、お引き受け致しますから。では」

と、会釈をして、海老屋の店へ引き返しかける一心太助へ、庄司甚右衛門はきいた。

「その後、松前屋さんの一件、どうなりましたね」

「それについて、今日は寄り合いを開きましたが、駿河台の御前にもお願い申してありますし、あの山犬様にも縁のあることで」

あとは言葉のをんでしまい、太助は、海老屋へ入った。大段梯子の下に、海老屋六郎兵衛が立って、心配そうな顔をしていた。

「元締、いま山犬組の頭領が、ご家来やお供を連れて下の座敷へ通って行きました。ここで、また暴れ出しますと」

「心配は要らねえよ、旦那。酒を運んでおくんなさい。あとで女も呼んでもらおうか。二階の仲間には、ちょっと中座をする、とお伝え願います」

そのまま太助は、段梯子の横を入れて、中庭に向った階下の座敷へ通った。

こういう遊び場所の習慣を守るとは忘れず、大刀は預けてきたが、それでも脇差は腰から離さず、今村左門は床の間を背に坐っている。

いかにも遊び慣れた、くつろいだ態度に見えるが、喧嘩をやめる気になったのではない。太助をにらみつけた目がきらきら光って、まだ体中に火がついているような感じがかった。

家来の白川馬之進は、座敷のすみに坐り、中間の藤内は縁側に控えていた。

「ただいまは、わたくしの扱いをお聞き入れ下され、ありがとう存じました」

「そのほうの扱いゆえ、喧嘩を思い切ったのではない。いつでも暴れ出してやる」

と左門は、頭からかぶせて、

「だが、そのほう、おれに聞かせたい話がある、と申したな」

「はい。それゆえ、ここへご案内致しました」
ちらりと馬之進のほうを見て、太助は、

「ご家来のおいでのところ、よろしゅうございますか」
「馬」

しぶい顔つきになり、左門は、家来へ顎をしゃくった。

「はずせ。藤内もだ。酒はのむが、女はあと」

「は」

訳を聞き返したりすると、いきなり左門の拳が飛んでくる、と知っている、馬之進は立ちあがり、縁側へ出ていった。

だが、いつでも若いあるじの呼ぶ声が聞えたら、すぐ間に合うだけの近さに控えている、というのは二人も慣れていることであつた。

「話せ」

左門が太助をうながしたとき、遊女が三人ほどで、燭台と酒や肴を運んできたが、太助に目顔で合図され、黙って座敷を出ていった。

膝を進め、左門の杯に酒をついでから、太助は切り出した。

「宇都宮においでのお方のことで、お父上様と言ひ争いをなされたそうでございますな」

「よう知っているな」

一気に杯の酒をのみ干してから、左門は苦笑いを浮かべた。

「大久保の爺じいから聞いたのか。他人のことに、要らざる説